

個人文書群の目録編成に関する研究—小野、長岡、馬場文書群の目録編成事例を通して—

The arrangement of personal archives—The case study of Ono, Nagaoka, Baba archives—

学籍番号：201421578

氏名：恩田 怜

Satoru ONDA

個人文書群が、歴史学研究にとって重要であるということは、多くの歴史研究者の共通認識になっている。以前より、多様な機関、例えば図書館、博物館、文書館、に保存され、それぞれの機関の方法で、整理され目録が作成されてきた。しかし、目録編成は経験値によるものが主流であり、個人文書群における編成論はいまだ発展途上にある。

本研究では、近現代個人文書群の編成を行い、個人文書群の整理論のなかの編成に関わる理論の構築に資することを目的とする。

研究の方法として、①国文研作成の史料情報共有化データベースを用いて、個人文書群の所蔵機関をリスト化し、その上で所蔵点数、文書群数などについて都道府県別、機関別に分析を行った。②個人文書目録をできる限り収集し、その編成基準を3つの段階に分け、その特徴や傾向を機関別や年代別に分析した。③小野増平関係文書、長岡半太郎資料、馬場重徳文書を対象に、構造分析を行い、加藤聖文が主張する、階層構造ベースの経歴（役職）によるシリーズ設定を適用し、分析を行った。

①の結果は、登録総機関数に対する個人文書所蔵機関の割合は、文書館が40%（47館中19館）で研究所に次いで2番目であり、図書館や博物館に比べ4倍以上多かった。②の結果は、個人文書群の第1編成において最も利用されている基準は、物理形態（39%）であることがわかった。③の結果は、小野文書において経歴を基準とする編成に有効性が見られたが、長岡資料、馬場文書においては、編成に際して困難な点が見られた。

シリーズ編成は、年代が特定され、加えて短期的な活動を反映した秩序をもつ文書群の場合に有効に働くが、年代が不明確で長期的な活動を反映した文書群には適用できなかった。文書館以外に文書が所蔵され、物理形態による分類が行われている現状において、他機関の多様な資料群にも適用できるような編成の手法が求められていると考える。

研究指導教員：白井 哲哉

副研究指導教員：綿抜 豊昭